

「こだわる」の語義変化

秋 元 美 晴

はじめに

最近、「大切な靴だから品質にこだわりたい」「『健康』と『美味しいもの』にこだわる私にとって至福の一時」(傍点筆者)のような「こだわる」の用法をよくみかける。これは二つとも一九九〇年の『文藝春秋』(十月号)の誌上で見つけたものである。前者は靴クリームの広告のコピーで、後者は安藤和津氏が書いているうめこんぶ茶の広告文の終わりの部分である。ここでは、「こだわる」は両方とも、「細かい点(所)まで気をつかっている」あるいは、「細かい点(所)まで注意を払っている」というプラスの意味合いで用いられている。しかし、一般的には「こだわる」は、「いつまでも過去の出来事にこだわっていないで、明日のことを考えた方がいい」のように、「考えなくてもいいようなこと、また、考へても仕方がないようなことをいつまでも気にしている」というマイナスの意味合いで用いられている。

「こだわる」の意味が多義化しつつあり、このまま定着するのか、あるいは、やがて広告のコピーに見られるようにプ

ラスの意味に変化していくのか。なぜ、これまでマイナスの意味合いで用いられていた語がプラスの意味合いでも用いられるようになったのか。一体、どのような要因が絡んでいるのか。前田富祺氏が述べているように、^{注(1)}

言語は一つの文化であり、その時代の文化の影響を受けるとともにその時代の文化を規定してゆく。

という観点に立って考えた場合、現代の文化のどのような側面を反映しているのか。この小論では、「こだわる」という語の意味変化を言語的な面と社会的な面から見ることにより、以上の点を考察していきたい。

辞書の意味規定

最初に、『日本国語大辞典』（一九七四年 小学館）の意味記述を中心に「こだわる」という語を概観していきたい。

こだわる ^{こだはる} 『自ラ四』①すらすらと行かないで、ひっかかったりつかえたりする。 *滑稽本・東海道中膝栗毛 一六・

下「脇指の鍔がよこっぱらへこだわっていてへのだ」 *滑稽本・七偏人一初・上「彼菓子鉢の羊羹を一と切とつ

て口へ入、ぐしゃりと嘸と生臭き匂ひがふんと胸へこだはり」 *硝子戸の中八夏目漱石V九「それ程拘泥（コダ）

はらずに、するすると私の咽喉を滑り越した」 ②気にしなくてもいいようなことが心にかかる。気持がとらわれ

る。拘泥する。 *当世少年気質八巖谷小波V六「賤しい根性は自然此間にこだはって居た」 *雪国八川端康成V

「君の方でこだわっているだけだよ」 ③故障をいいたてる。わずかのことに理屈をつけて文句をいう。なんくせ

をいう。こだわりをつける。 *浄瑠璃・娥歌かるた一二「達て御いとまを願ひ給へ共、郡司師高こだわって埒明

けず」 *改正増補和英語林集成「Kodawarite（コダワリテ）シヨウチ セヌ」

語源説

コは接頭語。タハル

はサハルの転（大言海）。

意味は大きく三つに分類されている。『新編大言海』（一九八二年 富山房）は、語源説のあとに、やはり意味を大きく三つに分類している。『日本国語大辞典』とは①と③が同じであるが、②が多少異なる。『新編大言海』は□とし、

カカハル。カカヅラフ。カマフ。執着ス 拘^{||}「物言ヒニみだはッテ、揚足ヲ取ル」
仲閒遊ビニホだはッテ、仕事ヲ
ナマケル

とある。用例には出典が示されていないので作例だと思われるが、はじめの用例は、「物の言い方につけこんで、あるいは、物の言い方にいちいちつかかって……」の意味で用いられており、『日本国語大辞典』の③の意味に近い意味で用いられている。二番目の用例は、「仲間遊びに執着して……」の意味で、『日本国語大辞典』の②の意味とほとんど同じ意味で用いられている。

右の二つの辞書に用例として載せられている作品が江戸時代のものであるので、次に『江戸語大辞典』（一九七四年 講談社）を見てみる。

こだわる（自ラ五）①かかわる。構う。取り付いたり引っ付いたりする。執着して離れぬ。文政六年・和合人 初中
「また折ふしは芸者に気障なこだわり方なぞがあつて、キヤッキヤツといふ声なんぞをさせたりなにかして浦山し
がらせて」

②つかえる。邪魔になる。文化四年・東海道中膝栗毛 六下「おめへの脇指の鏢がよこつぱらへこだわつていてへ
のだ、ト手をさし入てひねくりまはし、やうくわきざしをぬいてとる」

意味は二つに分類されている。この辞典の①は『新編大言海』の(一)にあたり、②は『日本国語大辞典』の①、『新編大言海』の(一)に該当する。『日本国語大辞典』の③と『新編大言海』の(三)にあたるのは、『江戸語大辞典』では、見出し語「こだわる」の一つ前にある、

こだわり (次条の連用形名詞) 故障。邪魔。抗議。享和・柳多留拾遺 十一「本家からこだはりのくる嫁をとり」にあたると思われるが、当時、動詞として用いられなかったのであろうか。

一八六七年に出版された『和英語林集成』には、

KODAWARI, -ru, -atta, コダハル, iv. To hinder, prevent, to be jammed, or wedged in, so as to obstruct. Toyu no naka ni kodawaru mono ga aru, there is something obstructing the pipe.

Syn. KOBAMU, JAMA WO SURU,

とあり、『日本国語大辞典』の①と同じ語釈があり、用例もあげられている。(用例の“Toyū”は「樋」のことである) 一八八六年出版の『^{改正}和英語林集成』には、

KODAWARI-RU コダハル iv. To hinder, prevent ; to obstruct ; to hold or persist in one's opinion ; to object ; toyu no naka ni kodawaru mono ga aru, there is something obstructing the pipe ; - te shōchi senu.

Syn. KOBAMU, JAMA WO SURU. SAMATAGERU, IHARU, IITSUNORU.

とあり、『日本国語大辞典』の③の語釈に該当するものをあらたに付け加えている。

『室町時代語辞典』や『日葡辞典』には、「こだわる」は見られないので、江戸時代になって表れた語だといえようか。用例の最も古いものが、近松門左衛門の『娥歌加留多』（一七一四年）であることから、十八世紀前半にはすでに使われており、その意味は『日本国語大辞典』の③の「わずかのことに理屈をつけて文句をいう」であったと推測される。その後、『東海道中膝栗毛』（一八〇七年）に「つかえたりひっかけたりする」の用例が見られることから、十九世紀前半にはこの意味で用いられるようになり、それから少したち、『江戸語大辞典』の①の用例、『和合人』（一八二三年）に見られるように、「かかわる かかづらう 執着する」の意味で用いられるようになったと思われる。これは『日本国語大辞典』の②にあたると言えよう。『改正増補和英語林集成』には、『日本国語大辞典』の①と③にあたる語釈があげられていることから、①と③の意味は、一九世紀後半にも用いられていたことがわかる。

ここで、「現代語の記述を中心に据えた、新しい型の国語辞典をめざしている」という『大辞林』（一九八八年 三省堂）を見てみる。

こだわるは^{こだ}③（動ラ五（四））①心が何かにとらわれて、自由に考えることができなくなる。気にしなくてもいようなことを気にする。拘泥する。「金に―る人」「済んだことにいつまでも―るな」②（いい意味で）細かいことにやかましくする。「ビールは銘柄に―る」③つかえる。障る。「脇差の鍔が横つ腹へ―っていてえのだ／滑・膝栗毛六」④苦情を言う。文句をつける。「達ておいとまを願ひ給へ共、郡司師高―って埒明けず／浄・娥哥かるた」

『大辞林』では、『日本国語大辞典』の②の意味を現代語の中心として挙げているが、ここに、これまでの辞書では見ら

れなかった、「(いい意味で)細かいことにやかましくする」という意味が加えられた。
 以上の辞書から見た意味の変遷を表にしてみると、表-1のようになる。

表-1

年代	1700	1750	1800	1850	1900	1950	1990
意味							
A. わずかなこと とに理屈を つけて文句 をいう	?	1714 『雑歌加留多』			1886 『改正和英語 増補 林集成』	?	
B. つかえる。 障る			1807 『東海道中膝栗毛』		1886 『改正和英語 増補 林集成』	1915 『附子戸の中』	?
C. 気にしなく てもいいよ うなことを 気にする			1823 『和合人』				?
D. 細かい所ま で注意を払 う							1988 『大辞林』

いわゆる六万語辞典でも「こだわる」の意味はCと記述されている。それでは、AとBの意味はいつごろから使われなくなり、Dはいつごろから使われ始めたのであろうか。

近・現代の文学作品の使用例

近世の作品の総索引は少なく辞書にたよらざるを得ないが、近・現代の文学作品には、総索引のあるものもいくつかあるので、その使用例から見ていくことにする。教育社から総索引が出ているのは、夏目漱石・森鷗外・芥川龍之介・志賀直哉・太宰治の各作家の作品である。このうち、

作品名	総索引の行数	使用例数	作品の成立年
坊っちゃん	1983	1	一九〇六年
門	3792	1	一九一〇年
彼岸過迄	4337	1	一九一一年
行人	6092	1	一九一三年
こゝろ	1300 1573 2133	3	一九一四年
明暗	528 8849 8854 8855 8856	5	一九一六年

森鷗外と芥川龍之介の作品には使用例が見られなかった。残る三氏の作品における「こだわる」及び、その居体言（連用形名詞）「こだわり」が、A・B・C・Dのどの意味で使われているのか調べてみた。どの作家もその作家の全作品に総索引があるわけではない。夏目漱石の場合も総索引があるのは十三の作品である。そのうち、上の六作品に十二の使用例がみられた。その内訳は上の表の通りである。十二例のうち、十一例は次に示したようにCの意味で使われている。（以下、傍点筆者。）

文学士なんてものはやっぱりえらいもんだ。妙な所へこだわって、ねちねち押し寄せてくる。（『坊っちゃん』）

これが彼女を見た瞬間の疑惑であった。この疑惑に初手からこだわった自分の胸には、火鉢を隔てて彼女と相對している日常の態度の中に絶えざる圧迫があった。（『行人』）

人間失格	右大臣実朝	彼は昔の 彼ならず	作品名	暗夜行路	小僧の神様	和解	范の犯罪	大津順吉	作品名
512 926	46 198 400 600 803 879	843	総索引の行数	563 6080 7068 8655 8735 8766	191	409 1080	253	300	総索引の行数
2	6	1	使用例数	6	1	2	1	1	使用例数
一九四八年	一九四三年	一九三一年	作品の 成立年	一九二一年 一九三七年	一九一九年	一九一七年	一九一三年	一九一二年	作品の 成立年

残りの一例はBとCの中間に位置するものと考えられる。

先生のいった自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後は何等のこだわりを私の頭に残さなかった。（『こゝろ』1300）

これは、「私の頭にこだわりを残す」であるからBのようでもあるし、また、「頭にこだわりを残す」全体でCの意味にもとれるので、BとCの中間にあるものと考えられる。

志賀直哉の作品には十一例見られ、内訳は上の表の通りである。十一例中、次の一例はBの意味で用いられているが、残りの十例はみなCの意味で用いられている。

ナイフはいつもより一寸も上へ行ってささりました。次に妻が両手を肩の高さに挙げて其腋の下に一本ずつ打ちました。ナイフが指の先を離れる時に何かべたつくような拘泥こどどったものが一寸入ります。私にはもう何処へナイフがささるか分らない気がしました。（『范の犯罪』）

太宰治の作品には合計九例みられる。

次の二例は、先の漱石の『こころ』(130)と同じように、全体でCの意味となると考えられる。

けれども長明入道さまのほうで、何か心にこだわるものがお出来になったのか、その後兩三度、御ところへお見えになられましたけれど、いつも御挨拶のみにて早々御退出なされ、將軍家もまた無理におとめなさらなかったようございまして。(『右大臣実朝』400)

……、それから後も御前に於いてこの禪師さまのお噂が出ると急に座をお立ちになったり、何かお心にこだわる事でもございますような御様子で、……(『右大臣実朝』879)

その他の七例はCの意味で用いられている。

三三例中、AとDの使用例は皆無で、Bが二例、Cが二八例、BとCの中間に位置すると考えられるものが三例である。以上のことから、『坊っちゃん』の書かれた一九〇六年(明治三九年)から『人間失格』の書かれた一九四八年(昭和二十三年)の間は、三人の作家の作品を見る限り、「こだわる」は、主にCの意味で用いられていることがわかる。Aの意味での使用例はすでに見られず、Dの意味での使用例はまだあらわれていない。また、Bの意味でも用いられることもあり、また、BとCとの中間と考えられる意味でも用いられていることがわかる。

一九六三年以降の使用例

次に最近の使用例から見えていくことにする。使用例は、手元にある一九六三年から一九九〇年までの新聞・雑誌・小説などから収集した。全部で三三例あるが、AとBの意味の使用例は皆無で、CとDの意味の使用例の内訳は次の通りである。なお、すべての使用例は資料としてアペンディクスにのせた。

Cの意味の使用例(十五例)

I. 動詞としての使用例

	出典											著者・筆者	ジャンル	使用例数	成立年	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1110	12	13				
	雨の中の噴水	音、沈黙と測りあえるほどに	日本経済新聞	母語と母国語	哀しい予感	拍手喝采	広告のことば雑感	ちょっとおかしいぞ日本人	朝日新聞	"	"	ア エ ラ	三島由紀夫	小説	1	一九六三
	武満徹	杉原民剛	田中克彦	吉本ばなな	丸谷才一	稲葉三千男	千葉敦子	不	久田恵	不	不	不明	不明	エッセイ	2	一九九〇
	小	エッセイ	投書	エッセイ	小説	エッセイ	エッセイ	エッセイ	論説	エッセイ	サブタイトル	広告(1)	不明	小説	1	一九九〇
	小	エッセイ	投書	エッセイ	小説	エッセイ	エッセイ	エッセイ	論説	エッセイ	サブタイトル	広告(1)	不明	小説	1	一九九〇
13	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	不明	小説	1	一九九〇
	一九六三	一九七一	一九八三	一九八五	一九八八	一九八八	一九八八	一九八八	一九九〇	一九九〇	一九九〇	一九九〇	不明	小説	1	一九九〇

表 - 3

	2423	22	21	20	19	18	17	16	出典	著者・筆書	ジャンル	使用例数	成立年
	狼たちへの伝言	"	For Your Excellent Life Cosmos	"	朝日新聞	"	"	文藝春秋		安藤和津	広告(1)	1	一九九〇
	落合信彦	"	"	"	"	"	不			不明	広告(2)	1	"
	エッセイ	エッセイ(2)	エッセイ(1)	広告(5)	広告(4)	広告(3)	広告(2)	広告(1)			ジャンル	9	"

Dの意味の使用例(十七例)
I. 動詞としての使用例

II. 居体言としての使用例

	15	14	出典	著者・筆者	ジャンル	使用例数	成立年
	日本語を外から見れば	人形嫌い		板坂元	エッセイ	2	一九八九
				吉原幸子	エッセイ	1	一九七六

II. 居体言としての使用例

	出典	著者・筆者	ジャンル	使用例数	成立年
25	朝日新聞	不明	広告(6)	1	一九九〇
26	"	"	広告(7)	1	"
27	"	"	広告(8)	1	"
28	"	"	広告(9)	1	"
29	"	"	サブタイトル	1	"
3130	文藝春秋	"	広告(10)	2	"
32	學燈	"	広告(11)	1	"
				8	

ジャンル別から見た特徴

表12からわかるように、Cの場合、十五例中九例が、次のようにエッセイからである。

たしかに、その国の言葉は、その国語の文法によって支配されるものだろうが、些細な音便変化などにそれほどこだわらねばならないものだろうか。(武満徹『音、沈黙と測りあえるほどに』)

小説には二例見られるが、このうち一例は、次に示すように、比喩的な用い方がされている。

そのとき少年は、雨のなかを動いてゐる少女の横顔のかけに、芝生のところどころに小さく物に拘泥こどいたやうに咲いてゐる洋紅の杜鵑まつぎ花を見た。（三島由紀夫『雨のなかの噴水』）

新聞からは、社説の本文中から一例、特集「学び合う日英新時代」という見出しの記事のサブタイトル、

ドイツに負けたくない伝統にこだわらぬ再生策（朝日新聞）

から一例、投書欄から一例収集した。投書からの一例は、千葉敦子の『ちょっとおかしいぞ日本人』に引用されていたものである。残る一例は週刊誌『アエラ』の紳士用品の広告文から集めたものである。

これに対して、表13からわかるようにDの使用例は十七例中十二例までが、新聞・月刊誌・PR誌を問わず、次のような広告のコピー、あるいは広告文の中にあられたものである。

大切な靴だから品質にこだわりたい（靴クリームの広告『文藝春秋』）
住まいへのこだわりを深めて（住宅の広告「朝日新聞」）

一例は、一九九〇年九月十八日の朝日新聞の全面広告のページにのった「学び合う日英新時代」という見出しの記事のサブタイトル、

健在クラフトマン気質 大量生産に負けぬ本物へのこだわり

である。一九九〇年の秋から英国祭が各地で催されており、多くの会社、デパート等が協賛のかたちで協力しているが、この記事もその一環として英国の紹介をしたもので、二ページにわたっているこの記事の下段にはデパート等の広告がた

くさんのっていた。そういう意味では、このサブタイトルも広告のコピーと考えてもいいかもしれない。

“For Your Excellent Life Cosmos”は東急不動産のPR誌で、住まいについての意見や情報がのっているが、ここからは各々異なったテーマのエッセイから二つの使用例を集めた。落合信彦氏のエッセイには二例が見られた。

真のインテリジェンスを備え退くことを拒み、こだわるべきは断固こだわる。(落合信彦『狼たちへの伝言』)

ジャンル別に見てみると、以上のようにCの使用例は、エッセイ、小説、新聞、広告、投稿と幅広く見られるのに対して、Dの使用例のほとんどが広告の中に見られるという、はっきりとした違いがみられる。これは、現在、Dの意味で使用されるのは、主に広告という特別なジャンルに限られていることを意味していると思われる。ただ、落合信彦氏のエッセイ集にもその使用例が見られるようになったということは、徐々に他のジャンルでも用いられつつあるといえよう。

アンケート調査

現代の若者が「こだわる」という語をどのように使用するのか、試みに、恵泉女学園短期大学英文科の一、二年生に「『こだわる』という語を用いて、短文を作りなさい」と指示し、書かせてみた。一〇六人中八人の例文は、

私の母はその事にこだわっている。

のように、^{注(2)}補語の意味が曖昧だったり、また補語がなく、文脈からも判断できなかったりして、CかDのどちらの意味で使用しているのか判別できなかった。残る九八人中、Cの意味で使用し文を作った者は四一人、Dは五六人であった。一人は、一文の中に次のように二度「こだわる」を用いている。

こ・だ・わ・る・事・は・と・も・大・切・だ・が、時・に・は・こ・だ・わ・り・す・ぎ・る・の・は、自・分・に・と・つ・て・よ・く・な・い・場・合・も・あ・る。

Cの使用例とDの使用例がほぼ同じ割合で使われていることから、現代の若者（例が少なすぎて一概には言えないが）は「こだわる」をCの意味としても、また、Dの意味としても使い、抽象化すれば「あることに専心（心を集中）する」の意味としてとらえているのではないかと思われる。

居体言「こだわり」の使用例

表12・表13からも分かるように、Cの使用例とDの使用例の違いで気がつくのは、いわゆる居体言（動詞の連用形の名詞化）の使用例の差である。Cの場合、十五の使用例中、居体言の使用例はわずか次の二例である。

…、特定のものに対するこ・だ・わ・り・や・愛・着……（吉原幸子『人形嫌い』）

…、かつての大東亜共栄圏内の諸国民を、外人と呼ぶことにこ・だ・わ・り・が・あ・つ・た・か・ら・な・の・か・も・し・れ・な・い。（板坂元『日本語を外から見れば』）

これに対して、Dの使用例は十七例中八例と約半数が居体言となっており、八例とも広告及び広告に準ずるものである。このうち二例は、

住まいへのこ・だ・わ・り・を・深・め・て。（朝日新聞 住宅の広告）

大量生産に負けぬ本物へのこ・だ・わ・り（朝日新聞 サブタイトル）

で、これは先のCの居体言の使用例二例と同じように、補語的要素が明らかかなものである。右の四例の補語は、「特定の

もの」「外人と呼ぶこと」「住まい」「本物」であるが、これは、補語＋動詞「こだわる」の形に近いものであるといえる。

ここで、居体言について考えてみたい。居体言は動詞と名詞の中間に位置する。

動詞 ― 居体言 ― 名詞

つまり、動詞的な性格と名詞的な性格を兼ね備えている。「こだわる」という動詞を考えた場合、この語の意味を完結するためには補語的要素が必要であるが、居体言にした場合は、必ずしも補語的要素を必要としない。右のCとDの四例は、構文的に考えた場合は、もちろん名詞的であるが、補語的要素が存在するという点からは、より動詞的であるといえよう。次のDの三例は、「指示詞＋居体言」の形をとっており、これも構文的には右の四例より、さらに名詞的である。

……。彼を語るエピソードに、フランス王妃マリー・アントワネットから依頼を受けた時計に時計学上可能な限りの知恵をそそぎこみ、なんと約二〇年もの歳月を費やした……という話があります。一個の時計の美と機能に、それほどのこだわりを持っていたのです。（『文藝春秋』 住宅の広告）

……。各々の店が守り続けているそのこだわりに、この国の紳士たちの美字を見ることができます。（朝日新聞 紳士服の広告）
……。旅の人、野外で釣る人や狩る人、歩く人たちが愛用した道具である。このようなこだわりグッズが多いので、大英国展にはぜひ殿方もお連れください。（朝日新聞 英国紳士グッズの広告）

各々、指示詞が「こだわり」の内容を説明している。最初の例文は、補語的要素が存在しており、その点からは、より動詞的であるといえよう。最後の例文の「このような」は「こだわりグッズ」全体にかかっている。「こだわり」はグッズ

を修飾しており形容詞的に用いられている。

これに対して、次の二例は「こだわる」の対象である補語的要素がみられないという点からも最も名詞的だといえよう。広告(1)はデパートの広告のコピーで、ゴルフ用品大会の宣伝であるが、「こだわりに応える」だけで、ゴルフ用品に精通している人にも十分対応できる品々を集めたということがわかる。ここでは「こだわり」は、「こだわる」主体である人を意味しており、実体を表す意味への転換がおこっている。広告(2)は紳士物のスーツの広告のコピーである。これは広告(1)のように「こだわる」主体である人を意味している、「(紳士服に)こだわる人のための英国製(紳士服)」とも、また、「金持ちの日本人」が「お金をたくさんもっている日本人」であるように「(紳士服)にこだわる英国人」ともとれる。後者は「こだわること」、すなわち「こだわる」心的状況そのものをさす意味に名詞化されたものである。残る一例は広告のコピーである。

たとえるなら、^{注(3)}ブレゲのこ・だ・わ・り・と・職・人・気・質・。フロンヴィルホーム。(朝日新聞 住宅の広告)

ブレゲのようなこだわり方で、「こだわる」方法を意味しており、「こだわる」という動詞の心的状況ではなく、実体的なものを表す意味へここでも転換が起こっている。

居体言の使用例はDの意味で用いられているものに多く、Dの八例は広告及び広告に準ずるものであるということは、どういうことを意味しているのだろうか。

Dの意味で用いられるものが多いのは、広告のことばが人目をひくものでなければならぬということに起因していると思われる。人目をひくためには、いろいろな手段が考えられるが、専ら言語的な見地に立って考えた場合、ある語を従来の意味のまま用いていたのでは効果がない。マイナスの評価の語として使用されていた「こだわり」という語を故意

MARUSSI LIMITED
Authentic Collection '90

ただわりの
クリエイティブ

NEW & LINGWOOD
LONDON, ENGLAND, ENGLAND
〈ニュー&リングウッド〉
メンズスーツ

●スーツ (C.100%)
¥90,000/¥85,000/
¥110,000(消費税別)
※メーカー直販でも扱います。

真髓

広告 (2)

秋のゴルフ用品大会

あすから25日(木)まで 8階(体育館)



PGAトッププロの支持を集める
クラブのマイクンなど、品揃え多彩に。

- 〈ウイグルン〉89インチバーク (91)..... **135,000円**
- 〈ウイグルン〉88インチバーク (91)..... **88,000円**
- 〈ウイグルン〉87インチバーク (91)..... 85,000円
- 〈ウイグルン〉86インチバーク (91)..... 125,000円
- 〈ウイグルン〉85インチバーク (91)..... 98,000円
- 〈ウイグルン〉84インチバーク (91)..... 98,000円

※買は丸丸丸丸 中絶時治プロです。
毎週土曜11時-5時、7階ゴルフ用品にてコンボインストロを扱っています。

ただわりのクリエイティブ

広告 (1)

にプラスの評価の語として、つまり逆の意味の語として使用することによって、人をハッとさせようとしたのではないか。広告は購売力を高めることを目的としたものである。当然、一般の人は広告のコピーや広告文にはプラスの評価の語かニュートラルな語が並んでいると思っっている。そこにマイナス評価の語である「こだわりの語」という語があり、それが目に入ると、一瞬驚き、その広告を注意深く見ようとする。それが広告をつくる側の狙いであると思われる。いたる所に広告のあふれている現在、読む気にさせる語として、「こだわり」は非常に効果的な語であつたらうと思われる。

では、なぜ居体言が多く使われるのであろうか。それは第一に居体言のもつ簡潔さと際立ちたちであらう。居体言にした場合、極端な例をあげれば、先の「こだわりのブリティッシュ」のように、補語的な要素がなくても表現可能となり、その分簡潔になる。また、「一個の時計の美と機能にそれほどこだわりの語を持っていました」を居体言でなく「こだわりの語」で表現したら、「一個の時計の美と機能にそれほどこだわりの語を持っていました」となる。こうなると、「こだわりの語」という語よりも「それほどまでに」の方が目立ってしまう。この広告の文では、「こだわっていること」を強調したいのだから、やはり「こだわりの語」を使用する方が効果がある。より簡潔で力強く、際立った感じを与える「こだわりの語」という居体言が広告で好まれて使用されるのは、以上のような理由であらう。

補語的要素との関係

「こだわりの語」の使用例が、どの意味で用いられているかを知るためには、補語的要素との関係から、また、補語的要素のない文は文脈から判断することになる。現在用いられているCとDの意味のどちらで使われているかを決める場合ももちろん右の方法による。

Cの使用例は、補語的要素がマイナス評価の場合が最も分かりやすいが、それは十五例中三例にすぎない。三例中、最

も明らかなのは次の例である。(傍線筆者)

……。卓越した技術と、因習にこだわらない感性と……。 (『アエラ』No.45紳士用品の広告)

「因習」という語は明らかにマイナスの評価の語である。次の一例は、補語を修飾している語がマイナスの評価の語の場合である。

…、些細な音便変化などにそれほどこだわらねばならないものだろうか……。 (武満徹『音、沈黙と測りあえるほどに』)
「些細」は、「取るに足りないさま」の意である。また、

商売柄、あまりにも肩書にこだわる人たちとばかり接しているためであろうか。(朝日新聞 投稿)

は、副詞「あまりに(も)」が打消し及び否定的な意味をもった語と呼応するので、この文において「こだわる」がマイナスの意味をもっていることがわかる。他の十二例のうち十一例は、補語的要素が、「物・母語ということは・景色・細部・通貨政策の自主制・二つのコマーシャル・伝統・同じこと・特定のもの・Spoken by PROSPERO」(プロスペローが言ふ)という指定・外人と呼ぶこと」と、プラス・マイナスの評価のないニュートラルな語及び句であり、文脈での使われ方次第で、プラスにもマイナスにもなる語である。残りの一例は、その文の前の文章全体を読まなければ、「こだわる」の補語的要素がわからない。

けれど、だれにこだわっていてもどうにも仕方のないことってある。(朝日新聞 久田恵「人生の裏庭」)

以上見てきたように、Cの使用例でも「こだわる」の補語的要素としてニュートラルな語や句が多くみられ、それらがマイナスの評価の語として使用されているか否かは文脈に依存せざるを得ない。ということは、「こだわる」という語が、Cの意味からDの意味へ移行することが容易であったという一面を意味しているといえるのではないだろうか。

言語的に見た意味変化の考察

AとBの意味で現在「こだわる」が使用されることはほとんどといていいほどない。なぜAとBの意味で使われなくなったかは、現時点では明らかではなく、今後、考察していく必要があると思われる。ここでは、なぜDの意味が新たに加わったかを考えてみたい。Dの意味は、「細かいところまで注意を払う」というプラスの評価の意味であるが、この意味に近い語としては、「注意する」「注意を払う」「配慮する」「気をつかう」「気を配る」などが考えられる。しかし、「注意する」は「注意」と名詞で使った場合、特に「忠告」の意味と混同されやすいし、「注意を払う」は「注意払い」として居体言で用いることができない。「配慮する」は意味が「他人や他のことのために心をくばること」と一つのため、混同されることもなく、また、名詞としても用いられるが、漢語のもつ力強さであろうか、少しおおげさで型苦しい感じが否めない。「気をつかう」「気を配る」は連語であり、「気づかい」「気配り」は複合語であり、「こだわる」のような単純語の簡潔さはない。たぶん、Dの意味を表す適当な語がなかったためであろう。

一般にある概念を表現したいのに、それに合う適当な語がないとする。その場合、三つの方法が考えられよう。一つは、全く新しい語をつくり出すこと。もう一つは、既存の語に新たな意味を付加すること。そして、もう一つは外国語から借入することであろう。

Dの意味である、「細かいところまで注意を払う」という概念を表現するためには、二つ目の方法がとられた。既存の

マイナスの評価の語の意味に対義関係にあるプラスの評価を表す意味を加えることにより、意味を向上、拡大させた。つまり、多様化させたわけである。

そして、今後、「こだわる」は「あることに専心する（心を集中する）」という、ニュートラルな意味となり、補語的要素及び文脈からプラスの意味にも、マイナスの意味にもとれるようになるのではないかと思われる。現在は、その過渡期にあるといえよう。

社会的に見た意味変化の考察

言語の歴史と文化の歴史は必ずしも等しいわけではない。しかし、言語も一つの文化である以上、その時代の文化の影響を受けるわけである。言語の中でも特に語彙はその時代の文化を反映するといわれ、語彙の中には、ある時代を鮮やかにうつしとっていると思われるものがある。「こだわる」もその中の一つの語であり、現代という時代を、そしてこの社会が有する文化を反映していると思えてならない。

現代の日本はぜいたくである。仕事はあふれ、それで得た収入ではしいと思ったものは何でも手に入れることができる。生産者側は消費者に買わせようと、少しでも違ったものと次々に新製品を提供し、古いものとの違い、他社の製品との違いを強調するために、あの手この手で消費の拡大をはかる。特に、過酷な競争下にある食品産業の業界は消費者に次々においしいものを与え、とうとう一億総グルメの時代を到来させた。江國滋氏が『波』（新潮社のPR誌、一九八六年十二月号38）の「日本語八ツ当り 十一」で、

近ごろむやみに目につくようになった「こだわる」という語法が、どうもひっかかる。「ホンモノにこだわりたい」

「わたしラーメンにこだわるヒトなの」 これちょっとおかしいんじゃないの。

と言ったのは、一九八六年であり、一億総グルメ時代の到来といわれた年と奇しくも一致する。

何でも目新しいものを追いかけている時は忙しくて、「細かい所(点)まで気をつかう」ということは否定的にとらえられていた。しかし、そういう時が長く続くと、目まぐるしい時代の変化に飽き飽きし、逆のものを求めるようになる。そして、「細かいところまで気をつかう」ことは、一転して良いという意味合いを持ち始める。一般大衆のこうした価値観の変化を一早く敏感に察知するのが広告業界であり、そのコピーとして「こだわる」という語を用いるようになったと思われる。

現代の日本人が毎日、目にし耳にする広告は膨大な量にのぼる。Dのプラスの評価の意味の「こだわる」の語も、様々な広告のコピーに用いられるようになり、大衆の耳目に触れる機会が頻繁になるにつれ、徐々に定着していったのである。この「こだわる」の語がDの意味を付加するようになったのは、広告によるところが大きいと思われる。広告は想像以上に現代人の言語に影響を与えていると思われるが、「こだわる」の語の意味変化はその好例のように思えてならない。

ま と め

この小論では、「こだわる」の語義変化を主に一九〇六年から一九九〇年までの資料に基づいてたどってみた。その結果、言語的側面はもちろんのこと、社会的側面がかなり重要な役割を果たしていることがわかった。この事実は単に「こだわる」という語にだけ当てはまるのではなく、他の語にも言えることであろう。今後、個々の語についての両側面からの語義研究が一層のぞまれる。

終わりに、この小論をさらに発展させるために「こだわる」及びそれと類義関係にある語を“意味の場”において体系的に研究することが必要であると思われる。

注 (1) 前田富祺「国語語彙史研究の課題」(『国語語彙史の研究 一』)(和泉書院一九八〇年)

(2) 小論では、「補語」を基本的には西洋文典の complement という考え方に基づいて使っているが、広く意味の欠けたところを補う語という意味でも用いている。

(3) 時計職人の名前。

参考文献

- 池上嘉彦『意味の世界』(日本放送協会 一九七八年)
- 稲垣吉彦『最近日本語事情』(大修館書店 一九八三年)
- 稲葉三千男「広告のことば雑感——その古さと新しさ——」(『日本語学』四月号 明治書院 一九八八年)
- R・A・ウォルドロン著 築島謙三訳『意味と意味の発展』(法政大学出版局 一九九〇年)
- 見坊豪紀・稲垣吉彦「新ことばのくずかご」(『言語生活』No.423 二月号 筑摩書房 一九八七年)
- ステルン『意味と意味変化』(研究社 一九六二年)
- 西尾寅弥『現代語彙の研究』(明治書院 一九八八年)
- 府川源一郎「広告のことばと国語教育」(『日本語学』四月号 明治書院 一九八八年)
- 前田富祺「語彙の変遷」(『岩波講座 日本語9 語彙と意味』 岩波書店 一九七七年)
- 前田富祺「国語語彙史研究の課題」(『国語語彙史の研究 一』 和泉書院 一九八〇年)
- 前田富祺「語義変化と意味関係」(『国語語彙史の研究 五』 明治書院 一九八四年)

○前田富祺『国語語彙史研究』（明治書院 一九八五年）

辞典・事典類

○大野 晋・浜西正人編『類語国語辞典』（角川書店 一九八五年）

○金田一春彦他編『日本語百科大事典』（大修館書店 一九八八年）

○国語学会編『国語学大事典』（東京堂 一九八〇年）

○国立国語研究所『分類語彙表』（秀英出版 一九六四年）

資料

一九〇六年から一九四八年までの資料は左記の総索引によった。

○近代作家用語研究会・教育技術研究所編『作家用語索引 夏目漱石』（教育社 一九八六年）

○近代作家用語研究会・教育技術研究所編『作家用語索引 志賀直哉』（教育社 一九八七年）

○近代作家用語研究会・教育技術研究所編『作家用語索引 太宰 治』（教育社 一九八九年）

一九六三年以降の資料（傍点筆者）

Cの意味の使用例（十七頁の表1・2の順）

1. そのとき少年は、雨のなかを動いてゐる少女の横顔のかげに、芝生のところどころに小さく物に拘泥こどいはつたように咲いてゐる洋紅の杜鵑つばき花を見た。（二島由紀夫『雨のなかの噴水』『二島由紀夫全集』新潮社 一九六三年）

2. たしかに、その国の言葉は、その国語の文法によって支配されるものだろうが、些細な音便変化などにそれほどこ・だ・わ・ら・ね・ば・ならぬものだろうか……。 （武満徹『音、沈黙と測りあえるほどに』新潮社 一九七一年）

3. なにかこの人の人柄がしのぼれてほのぼのした思いになったことがある。商売柄、あまりにも肩書にこだわる人たちとばかり接しているためであろうか。(日本経済新聞にのった杉原民剛氏の投書 一九八三年)

4. 「母語」ということばに私がとりわけこだわるのは、じつは、日本語にはいつのころからか「母国語」ということばが作られて、それが専門の言語学者によってさえ不用意にくり返し用い続けられているからである。(田中克彦「母語と母国語」岩波書店『図書』十月号 一九八五年)

5. おぼは立ち上がった。「昔、見るはずだった、見ていなかった景色も見た。別にこだわっていたわけではないけれど、何だかすつきりしたわ。……」(吉本ばなな『哀しい予感』 角川書店 一九八八年)

6. これはおそらく「Spoken by PROSPERO」(プロスペローが言ふ)といふ指定にこだわったものだらうが、詩には、これはもちろんブランク・ヴァースを除いた上での話だけれど、エアリアル之歌のような詩とプロスペローの朗誦するやうな詩との二種類がある。(丸谷才一「拍手喝采」 中央公論社『みみづくの夢』 一九八八年)

7. たった二つのコマーションルにこだわりすぎたかも知れない。しかしじつは、どのコマーションルも、大衆の潜在願望や価値観に照準を定めている、という事実を抜き出すためのだから、これでいちおう十分だらう。(稲葉三千男「広告のことば雑感」その

古さと新しさ」 明治書院『日本語学』四月号 一九八八年)

8. ところが、この細部にこだわるクセが、日本人の強味でもあるのですね。(千葉敦子『ちょっとおかしいぞ、日本人』新潮社 一九八八年)

9. ところが英国は、通貨政策の自主性にこだわるサッチャー首相の信念もあって、この制度に参加せずにきた。(朝日新聞 一九九〇年)

10. けれど、だれにだってこだわっていてもどうにも仕方がないことってある。(久田恵「人生の裏庭」 朝日新聞 一九九〇年)

11. 結局、人は何かを得るためには何かを捨てなくちゃならないわけだし、同じことにいつまでもこだわっていたら身動きがで

くて、新しく生き直すエネルギーも湧(わ)いてこない。(久田恵「人生の裏庭」朝日新聞 一九九〇年)

12. ドイツに負けたくない伝統にこだわらぬ再生策。(朝日新聞 一九九〇年)

13. ほぼ一世紀前。フィレンツェのフィオルダリン通りに皮革工芸の店が誕生した。卓越した技術と、因習にこだわらない感性と…。

(『アエラ』 No.45 一九九〇年)

14. しかし「スカート切り」も一種のフェティシズムであるという見方からすれば、特定のものに対するこだわりや愛着が、それを破壊する方向に働く、サディスティックな面をももち得ることは容易にうなずけるのだ。(吉原幸子『人間嫌い』思潮社 一九七六年)

15. 外人と日本人のいずれにも属さない東洋人を意味したのだが、かつての大東亜共栄圏内の諸国民を、外人と呼ぶことにこだわりがあったからなのかもしれない。(板坂元『日本語を外から見れば』創拓社 一九八九年)

Dの意味の使用例(十八頁の表13の順)

16. うーん、開放感「健康」と「美味しいもの」にこだわらる私にとって、至福の一時。(安藤和津『文藝春秋』十月号)

一九九〇年)

17. フロンヴィルホームは、時代を超えてこだわり続けます。(『文藝春秋』十月号 一九九〇年)

18. 大切な靴だから品質にこだわりたい。(『文藝春秋』十月号)

19. 時代がどんなに流れようとも、そのライフ・スタイルにあくまでもこだわり続けようとする頑固なまでのスタンスこそ、次々に新しいコト・素晴らしいモノを生み出してゆく大きな源なのでしょう。(朝日新聞 一九九〇年)

20. 小物にこだわりぬく英国紳士グッズ。(朝日新聞 一九九〇年)

21. イギリス人ほど住居にこだわる民族はいないと言われる。(“For Your Excellent Life Cosmos” No.70 十一月号 一九九〇年)

22. そんな時、プライベートタイムをもっとおしゃれに楽しむばかりでなく、個性的なメッセージとしてあなた自身を表現するインテリア・メディアとしての照明にこだわってみませんか。(『For Your Excellent Life Cosmos』 No. 70 十一月号 一九九〇年)

23. 24. 真のインテリジェンスを備え退くことを拒み、こだわるべきは断固こだわる。(落合信彦『狼たちの伝言』 小学館 一九九〇年)

25. ロンドンこそ世界一のメンズファッションのメッカです。各々の店が守り続けているそのこだわりに、この国の紳士たちの美学を見ることができません。(朝日新聞 一九九〇年)

26. こだわりに応える。(朝日新聞 一九九〇年)

27. 住まいへのこだわりを深めて。(朝日新聞 一九九〇年)

28. 旅の人、野外で釣る人や狩る人、歩く人たちが愛用した道具である。このようなこだわりグッズが多いので、大英国展にはぜひ殿方もお連れください。(朝日新聞 一九九〇年)

29. 大量生産に負けぬ本物へこだわり。(朝日新聞 一九九〇年)

30. たとえるなら、ブレゲのこだわりと職人氣質。(『文藝春秋』 十月号 一九九〇年)

31. 一つの時計の美と機能に、それほどのこだわりを持っていたのです。(『文藝春秋』 十月号 一九九〇年)

32. こだわりのブリテッシュ (『學燈』 9 丸善 一九九〇年)

vol. 87